

ミオヤの光

十二因縁の卷

十二因縁

- 一、無明。過去の無明心を本として一切煩惱生じて生死の源となる。人類は生物の旨目的意志より進化せしもの故に個人は再び之を繰返す。
- 二、行。煩惱に由て善惡の業を爲し身を六道に受けて變作す。倫理と生活上の向上向下は自己の行に依る。
- 三、識。業に依て造られたる識が母胎に託する一刹那。向上向下賢愚の性質は父母より其生命と共に遺傳す。
- 四、名色。神識が母胎に託して父母の分ちたる形質と合す。精蟲卵子との兩性の形質和合して胎兒となる。
- 五、六入。胎兒七日毎に變じ四十週にして六根かたちつくる。娠中の母の身と心の持方は其胎兒の性質に影響を及ぼす。

六、觸。兒生れて初め視聽未だ感せず唯觸覺あるのみ、小兒母の懷にある三年體育上に大に注意すべき時。

七、受。兒童の心は白紙の如し其薰陶の如何に依て善惡種々に薰染す。家庭學校及び周圍の事情の薰を受けて其習慣性を造る。

八、愛。十四五歳より衣服資具類及び男女の事等に愛戀欲生ず。相愛の間に於て感化の力によりて結婚後其性格を一變すと。

九、取。家庭及び外界一切の境を執着し其目的の爲に執して善惡一切の行爲を爲す。

十、有。其執する處善惡の業を成就し三有の果を引べき力を有す。向上若くは向下したる自己の身心の本質を其子に遺傳す。

十一、生。善惡の業を有せる種子識が未來苦樂の生を受く。父母及其祖先の形質は其子孫に遺傳す。向上向下は各自の責任なり。生命を父母に受く人生は向上すべき責任を帯て生れたり。

十二、老死。人生の行路幼より老に至り苦樂幸不の中に未來の因を作る。人生の競争場裡道德上生活上其勝敗は其心行に因る。願くば遺徳上名譽の月桂冠を戴きて凱旋せん。業を後昆に譲れよ。

無明。輪廻生死の一大原因は無明である。無明とは生の真理をさとりえる心靈の光明なきを以て自己を知る自覺なきなり。凡夫の心は無明であるから生の從來する處死の趣向する處を自ら知らず冥より冥にさまよふは、蓋し心靈の光なければなり。靈性の光なければども神識は活靈物なれば、靈的無明にて生活々動す。無明の神識の奥には佛性てふ靈性が伏在すれども、琢磨せざる珠と同じく未だ光は發せざるなり。

二乗及び、佛陀の大聖者は已に其靈性の光が顯ははれて十方三世に精神の光が照

し、聖人は已に靈性が覺醒し心明覺となり、凡夫は靈性覺醒せず無明に眠れり。聖人と凡夫とを喩ふれば小兒と大人の如し。人生れて孩兒たりし時は精神意思はあれども不識的意思にして人類としての意識未だ發達せず。故に己に成人に比ぶれば意識的意識は眠りて未だ覺醒せざるなり。身體と共に精神が發達して意識的に精神が活動するに至るは人性が覺醒したるなり。故に小兒は人性の無明である。小兒は不識的意思にて泣く動く哺乳す。精神あればこそ動く。然れども不識的精神である。人類及び六道の衆生は佛陀及び聖者に對すれば靈性未だ覺醒せざる小兒である。故に無明と云は靈性覺醒せざる精神のことなり。盲動的的精神なり。不識的精神なり。此の無明的精神が誠心と云ひ靈魂と名づく。これが生の本體である。是が生命の一大原因となりて活動するを行と云ふ。この行爲によりて精神が種々に轉變す之を業識と云ふ。無明を因として次に行を起す。

行。行とは行動なり。また行爲なり。即ち業行なり。此行動には無明の精神の活動即ち生理的衝動と云て活きんとする元氣あり、こは人類より已下の動物にありても生理的衝動として、活きんとするには二種の職分あり。一に榮養と二に生殖である。榮養によりて即ち自己を保存し、生存し生殖によりて自己の種族を保存す。此二種の職分は生物の普遍性にして、いかなる生物も生くる物として此の業を務めざるはなし。生物は各其職分をつくし其業作によりて其本能の資性を益々發達す。本能に資質を具備したりとも、若し専ら業作行爲なければ自ら發達するものにあらず。生物の元因たる本能には六道何れに向ても發現すべき性質が具りて、其のつとむる各方面に向て發達す。喩へば人間の精神及び身體に於て、其能く使用する處の機能は益々發達する如く、無明の心識は其行業に隨て種々に變成す。

活動の心識が業に從て六道に變化す。六種に變成する處の規定は因縁所成なり。之の因縁に規定せられて六道に變ず。活動の心性が自己に活動せんとする元氣の有せるは元因にしてこの元因の心性を種々に變成するものは助縁を待つ。例へば子を生成

するに父の種性を原因として母の養成を助縁として人を生成すると同じく、また兒童を教育するに家庭と學校と及び周圍の境遇に規定せられて種々の性格を成す如く、自己の生得の資性を元因とし周圍の境遇を助縁とし、此因縁より業を作して六道を造作す。其人の生得の資性と境遇の縁とが相應せざる時は其資性を充分に發達すること能はず。

行に由て六道を造る因縁はここに原因たる資性が、惡に傾き易き少年あり、此少年を完全なる惡人とせんに或は家庭に置きて、また惡友と惡縁によりて、此の少年を完全なる罪惡人と鎔化すべき機關あらば、此の少年は遂に大惡人となり恣に罪惡を犯す殺人強盜詐僞放火等の罪惡を犯してなりとも己が惡欲を充しめんとする、其罪惡は屢々犯行するに隨つて益々惡性惡習が性となりて、遂には全く逆惡邪見地獄の性格と及び地獄墮獄の因縁成熟するに至るべし。假令其資性に於ては最も邪惡に傾き易き質を具備すると、家庭教育及び善友等の周圍に於て罪惡に誘導すべき機關缺乏し、唯善にのみ誘導せらるる時は完全たる善人とはならざるも、邪惡の行爲は遂に能はざるべし。

人々善惡六道何の方面にか傾き易き資性は本能的に具したるも其縁に隨て六道の性格と行業とが成熟すべし。上に在て暴惡の表現たる夏の桀王殷の紂王の如き、また下に盜跖の如き、洋の東西を問はず何れに。此の模型に屬するものは、何かの因縁によりて斯る邪惡の性格と行爲とを完全に發達せしなり。之が原因とそれを完成せしめたる助縁とがなかるべがらず。彼等は殘酷非道逆惡の性格の行爲とに緣て墮獄の資格を完成せしものなり。屢々行爲によりて習慣の性を成す之れ性格なり。既に性格に於て邪惡と化成する時は良心は癱痺し自己の罪惡に對して良心の呵責を感せず。所謂の自己の惡臭を感せざるの態の如く諸の罪惡發達して彼は自己の格を莊嚴する金箔の如くに感じ自ら罪惡行を誇るに至る。ここに至つては已に墮獄の性格成熟したるものとす。

識。識とは已に過去の行に由て成熟したる業識が過去の身を離れて現在の身を受けんが爲に、縁に催されて母胎に托せんとするの一刹那、形を離れたる中間を、過去の身を離れ現世の身を得ざる一刹那を識と爲す。

識は已に本來六道に一定したる靈魂なるものあるに非ず。即ち是は人間の魂是は畜生の魄として本來特殊性あるに非ず。本來の心識は即ちアラヤ無明の靈活心性にして善惡何れにも成り得べき、隨縁の業に隨て種々に異熟す。水の方圓の器に隨ふ如く、また白糸の染るに隨て種々の色を爲す如く、人が本能的に、是は官吏の資性は農夫是は職工と定りたるにあらず、然れども生れてより數年間の修養の結果として、境遇の縁に隨て或は法律家となり或は軍人となり又は農夫となり或は商人となりて已に其業に熟する時は一定して資格具備するに至るが如し。

人の一生の善惡の業はつひに其性格に隨て六道の識を成す。これ數年行業の結果なれば之を業識と爲す。また異熟識と名づく。是を華嚴には心は工畫師の如く種々の五蘊を畫くと云て、心業の如何に由て未來の身と心とを六道十界種々を造作す。

過去の身形を辭して現在の色形を受くるまでの識には形無と云ひまた有と云ふ二説あり此中間を中有と云ふまた中陰と曰ふ。

いかなる形式を以て轉生するか。三種の愛生すと。

三種の愛とは一、境界愛。二、自體愛。三、當生愛。

初め境界愛とは人自己に命數已に盡きて生命終らんとするに臨みて先づ生理の自然として其精神に感じ起すものは境界愛とす。即ち五官に感ずる所の萬物に於て、從來我所有と執し來りし處の妻子眷屬より一切の資具家屋衣服より其他自己の嗜好品に我所の念に驅られて凡ての物に愛着の念熾なるを境界愛と云ふ。

二、自體愛とは外界を縁する念は收りて次に第七の我愛執の自體を愛する念熾に起る。是また生理の自然にして、自體をば我所有の最愛なるものとして執着し來りし此身體を今や離れんとするに當りて凡夫の情として自ら愛着の念切なる之を自體愛と云

ふ。

三、當生愛とは已に五六七識は收りて當に終らんとするに臨んで唯殘るものは第八アラヤ識が業力の爲に感じ來るものは、業已に熟し因縁已に成て現し出るものは當生の境界なり。當に生れんとするには父母の因縁を藉らざるべからず。縁つて當生の父母の相眼前に現し來れり。其當生の相は其業に隨て六道何れにか感ず。今暫く一二を示さば惡業已に純熟して地獄に墮せん人ならば自己の心中に夢の如く感せん。先づ惡人の終りに臨んで病氣の爲に劇苦身に逼り斷末魔の苦しみ云ふべからず、炎熱燒かるる如し。時に謂らく若し冷水清める池あらば之に入らばこの熱苦除くことを得べしと念する時、業力の所感として清凉なる澄水湛々たる蓮池現前せり。歡喜に堪えずして蓮池に身を投じたりきと謂ふ時正に此命終りて一息再び還らず、彼の魂は思ふに變じて炎々たる火事と化す、火事にて直ちに地獄に墮す。また業已に定りて畜生に生せんものは即ち感ず、夢の如くに當來の父母たる雌雄の兩馬春期の相の現るを見て便ち愛欲の念を起し忽ちに其心念は馬胎に投せり。また人界に生を受けん者はまた夢の如くに父母を見て愛念を生じ、已に托生するに及んで從來我身と觀じ來りし形骸は郊外に棄つべき老廢物に過ぎざるに至る。業縁種々ありと雖も愛に由りて托生す。之を當生愛といふ。托生の一念を識と名づく。

名色。因縁已に成て母の胎に托す。過去の業に熟し來りし識を名と名づけ、父母の遺傳の形質を色と名づく。識と形質と合したる時なり。

無明盲動の活識は種々の行業を起しこの業行によりて業識を成す。無明と行とを過去二因として識、名色より愛に至るまでの五支を現在の五果と名づく。

親子の關係は親子の因縁熟して識が母胎に托して生を現在にうくるにつきては其因縁投合して親子となることを得。例へば等流因等流果として過去に於て人生のうち福有なる業を以て其神識を成熟せし爲に福貴なる父母の家に托胎しまた腦髓の豊富なる宿業によりて健全なる腦髓の父母に托生する如きこれを親子の因縁投合すと名く。これ

に由て生を受くこれ因縁和合せるなり之を等流の因果と名く。

觸とは托胎したるアラヤ識即ち無明の心識が過去の身心に於て經驗し記憶し來り五識六七識の經驗も記憶も已に還して唯一切の業を貯蓄せる無明識のアラヤのみが托胎しこの身體を受くるとして其父母に遺體を稟け現在の身心に於ては新生にして未だ一點も印象なき白紙に過ぎざりし胎兒が初めて分娩したる時は五官 形あれども未だ視聽等の感覺は不可能なり。只此時に於て初めて感覺すべきものは身體の體體なる觸覺あるのみ。初生の當時は未だ明らかならざるも物體の觸覺は感ぜらるるものの如し。いかにとなれば初めて分娩せる兒も冷き物又熱せる物の觸るれば忽ちに聲を發して泣く。初生を觸覺の位と名づく。

當時は本能的に其兒體に觸るるに若し其身に適すれば安眠し適せざれば忽ちに泣く。故に産浴を施さんには先づ其の小兒の自然に適する様に抱くことに注意すべし。初生の兒の爲には注意すべきものは哺乳を以て營養することと觸の溫暖宜しきを得べき衣服及び保傳の方法なり。この時は精神の智能を養ふべき要なく只身體を健全に保養すべき一あるのみ。之を觸位と云ふ。

受。別しては感覺惣しては此時代は一切受納の時代なり。生理の自然として内部の機能はますます發達し五官も發達して外界の事物を見聞し、小兒生れて初めて何分かに感覺機能が發達してより愛の生殖機能の發達せる時代までを受の位と云ふ。凡ての感覺より知識經驗研究等の愛は生涯に亘る、此に云ふ處の受の位とは生殖機能の發達する時代までを云ふ。

小兒初めてカタコトを云ひ初めて歩行する時より此世界の凡ての事は皆彼等が爲には見る物聞く物一として珍しからざるものなし。

亦此小兒より嬰兒童子の時代は自己獨立の身心發達せしものにあらざれば父母及び周圍の力によりて生存し又身心共に發達せらるる者なれば受動的なり。故に此の徳を過去より受たる現在の果と爲す。

已に成人期に達すれば現在自己の活動が未來の原因となりて善惡苦樂自ら造作すべき力を自己に有す。されども受の時代は然らず。自己に全く自己を支配し自己を發動し獨立自營の格は未だ有せず、受用時代また修養の時期なり。身心共に父母及び他人の保護によりて維持す。此時代は性格を善惡邪正何れにも養成し得べき折なれば尤も大事なり。此時代は個人的性格を善惡邪正大道何れにか燦化し養成すべき期なるを以て其父母たる者又師保たる人宜しく注意し其教養に力を竭して忽にすべからず。是性格を六道何れにか其方向を定めしむる時なればなり。偉人天才が他の教示を待たずして自ら自己の天才を發揮する如きは例外に屬すべし。

人の體と徳との三機に於て何れも其養育を怠るべからず。また此の受の時代は模倣性が熾にして周圍の人の一舉一動悉く好んで之を模倣す。孟母が其子軻を能く薫陶感化得せしめんが爲に其居を三遷せしも此時代なり。若し此受薫の時代に於て其薫陶を誤る時は遂に地獄鬼畜の性格たる第二の性を造りてまた終生挽回すべからざるに至ることあり。賢母と及び教師が有爲の英雄を造作するは此時代を逸して得べからず。

愛。愛に動物的愛と人類の高尙なる愛とあり。深遠なる意味の愛を養ふには人類は他の動物と異にして愛が深くなる様に育養せらる。生れて三年は母が乳房を哺めて成長するは慈愛に富める母親が晝夜の分ちなく小兒に注ぎつつある愛は自然と其兒に愛情を養ふ所以であると。

トラモントの説に、人の親たる者他の動物に比して養育する期の永きは、親の愛情を小兒の心に印象させて小兒に愛情を涵養し高潔深厚なる愛を有ち、社會的生物たらしめんが爲なり。受の期に於て父母に涵養せられたる愛情の根は深くして身體の發育と共に成長して愛の機が稍成熟せんとするに臨んで愛情の蕾は將に綻びんとす。

經には愛欲は是生死の根本なりと。寔に是愛欲の生物に存する、生理の自然にして、異性に對する愛欲なかりせば生物の種族は斷へ果つべし。生理の規定として生物

に存する愛情の暖氣は生命として存せり。

生物は愛なる熱情が消え失せなば、再び萌芽せざる草の如く春來つても彼等は春を覺らざるならん。されば人はたとひ闇憊たる囚屋に囚はれて枷鎖に身を繋かれ死に瀕せんとする時に臨んでも最愛の妻が溢るる情纏れるを内心に感ずる時は冷極りたる獄内に一箇の暖爐は胸裡に温かなりと。

愛に子に對する愛、夫婦の愛、子より親に對する愛、兄弟姉妹の愛、また博く衆を愛する如きあり。今は生理上の　は母子の愛別しては男女の愛の如きを云ふ。

ウーランドの詩に三青年と題して愛の深きを詠めるあり。三青年ありてライン河を渡りて其途中の酒肆の倚子によりてさて此纏の酒は殊に好きなれどもついで家の娘は如何にと質しければ、母なる女曰ひけるは、さてとよ御尋ねの娘のことは此頃病魔の爲に侵されていまはあの世の客となりて未だ死骸は奥の室にありと聞くや、三人の青年は交る々々奥室に入りて棺の中なる美しい娘を見る。甲はああ美なる哉若し生存せるならば我はいかばかりか深く愛するであらうと。乙はああ美しき女子かな、生存する時に私の愛の深さはとても言語には能はざりしほどなるに。丙はああ、美しい女、生存せし時に眞實に予は汝を愛し死すとも永久に吾愛は變ることなしと。

取。取は執着執意のこと。執とは愛戀の已に成熟して固定したるもの。愛は感情の作用にて取は感情と意志とに互りて深く内的に根底を成す物にしてまた愛の根ふかきものとも云べし。愛が全根を成して執心となる時は容易に除き難し。妻子の如きまた有情非情に不拘、自家の所愛の境に對して執着して捨がたき心なり。愛と取とは何れも生理の規定として生物に具はる性能なれば己が愛する物を執着す。夫婦の如きは本其體を異にして双方相合して一の生殖の働きを爲す如くなれば原始動物の如きは一身に兩性を具有したりしも、生物が稍進化するに隨つて兩體と分れたり。然れども生殖作用に至りては兩性相交つて一人の兒を産殖す。故に此兩性は同體の分兩性とも云ふことを得べきなれば生殖に付きて兩性共に片體たるものなり。然れば生理の自然とし

て即ち因縁として相互に自己の異性方面なれば相互に親愛や愛すべき理存せり。而して其愛の固形物たる執意に至つては唯感情として愛するのみにあらず目的たる種屬保存の理よりして觀るも相互に自己の片體として執着すべきは理の自然なり。執着は目的物を愛して未來いつまでも捨つること能はざる心意なり。人其の愛する物を執着す。

夫婦相待ち因縁相倚て一家を成す。一家の中心は夫婦にあり一切の衣食住すべての資具は一家を成す夫婦の目的を達せんが爲の附屬品なり。人の意志は目的物に執着して妻子及び一切の家具財産に執着す。

十一 囚縁

無明

空界蒼々かぎりなく、三際端もなかるべし、時間空間超えにける、盡法界の、太陽系に繋がる、此地に生を受けし身の、地球は宇宙の無限なる、海に立ちたる泡の如と、我等此地に生を享け、幾億無数の生物の、一に連なる我にして、實に果敢なき極みなれ、生物原始の當時より、乃至人類に至るまで、世を経たること數もなく、進化の階級さはみなく、たとひ無量の代々を経て、種類は如何にかはるとも、生理の心に一系の、綿々として續がれる、中心精　斷えまなく、生物生命　の系、衆生　生の原心は、無明即ち生理衝動、生物原始のアーメーバに、有する精神生命を、理には如來法身の、性より分れし性を具し、佛性具有は理のみにて、無明の盲に生命を、活んと欲する氣味あるを、無明生理の根本は、微粒　素の微には未だ、動植物と分たぬを、微粒に有する無明より、彼本能に具はれる、己を營む欲性と、また自衛防禦の能力あり、么微の蟲よりも、乃至すべての動物に、己を養ひ敵を禦ぐ、防禦避難のつとめあり、不識にあれども自ら、生理の衝動を心とせり、幼稚微虫に具はれる、生理の欲をみては、意識的なる人類に、益々我欲發展し、己を營む職分は、すゝみて貪る欲と

なり、敵に對する防衛は、瞬となりて現はれぬ、生理衝動と盲動と、人の愚痴とはなりにけり、

此三毒の煩惱は、原始の微虫に具はりて、進みて人となりてより、いよいよ意識に發展す、人が始めて胎内に、宿る精蟲にも、生理衝動具はれり、即ち三毒の種子あり、生理の欲が母胎にて、養はれては産にけり、小兒生れて始には、不識の意思に、初めに感覺發しては、漸次に感情發達し、理性の意志は人の、成熟したる時にあり、人の性たる理性、具すれど未だ幼稚なる、兒には潜伏態にして、生理の自然に活動す、小兒は無明の中にして、夢の中なる夢なれや、人に天と理と靈の、三性已に具はれり、天性は感覺、生物生理の欲などは、動物共通性にして、生物界に互るなり、理性未だ發せずば、只性慾に驅られては、自己の欲のみにして、他の動物の本能に、盲從するより甚し、意識的に利用して、我性慾を貪るは、害俗妄佗の所爲にして、無明の中の惡なれや、人道照す理性にて、自ら修めて自らの、生理の慾を抑制し、動物意思を御し、人類としての道徳の、秩序を正しく行ひて、常識の良心を中心に、己を照すは理性にて、人道の明き人にも、精神の奥の靈性の、光が未だ發せずば、小我の迷智に惑ふなり、無明は生理衝動は、惑性即ち煩惱の、自然不識の意氣にして、此無明心に一切の、善要邪正十界、三千性相具備せり、例は植物の種子に、胚珠に有せる性分が、水熱の縁に資けられ、萌して根莖となる如く、無明の心に生物の、善惡邪正一切の、本能性を具備しては、無數の性相備はりぬ、外界の縁にたすけられ、種々に顯動し、無明生理の衝動の、外部の縁に應化して、混沌一素の無明なる、一素に胚せる性分は、外部の縁に資られ、種々の分類に變化して、世界に布ける一切の、生物界と現はれき、一切生の理には、一定したる條理なり、例は生理の自然には、天則に規定せられ、千差萬別複雑、極まりなき萬物に、一貫したる條理あり、すべての條理は悉く、因縁因果の規定あり、本來自然の理法をば、さりととも知らず、無明と云ひけれ、

業（アラヤの勢力、業と云）

煩惱即ち生理衝動の、煩惱心に衝動に、自ら活動する力用、あるを業と云ふ、此衝動が因縁に、随ひ種々に發展す、理力を業と云、この活潑に、自動の性ありて、自己の性に適する、生理官性力業が、自發自動に發達す、此活動は生理に順應する方る、發達する勢力なり、例へば身體の分々にも、活動すれば發達す、其活動の動機には、種々の因縁多し、或は雌雄淘汰、また自然淘汰、永く活動休止せる部分は、機能つひに敗亡す、人の身體機能には、累代使用せざる爲め、活用長く廢せるは、不隨意筋肉の類なり、生理の縁に規定せられ、使用する機は發達す、業は生存競争の、戰場に立ち健闘し、外部の刺激に克んとて、益々活動して進む、生物原始の蠕動の、當時も既に競争の、ことに活動止まるなく、自己勝たざれば敗亡す、身命賭しての競争に、互に進化の因縁は、己に有せる業力が、外界の縁に順應し、種々の方面に向ふて、向上進化して、地上に分布の生物が、種類數なく發達の、程度も階級幾多なり、生理衝動業動の、因縁かぎりあらざりき、外部身體の種類のごと、内的生活心意の、種々に分れし品類は、いかでか數へ盡すべき、無明衆生の心識に、惡善邪正六道の、性能本自具すれども、そは善惡何れにか、活動つよき方面に、益々發達することは、身體機能の部分が、用不に發達なすごとし、たとへばアルコール性が、感覺性を刺戟して、屢すれば其機能が、痲痺して量を増ざれば、感する性がなき故に、已にますます進むごと、すべて五欲の官能は、屢爲れば發達す、蓄財益々進む時、愈々趣味を感ずごと、肉欲我欲のは、積るにつれて進むなり、たとひ好まぬ業にても、屢爲ればいつしかに、性が變じて好きとなる、人の心機は善惡の、作業はすべて作爲よりも、屢々作業を積む時は、習慣已に性となり、惡も轉じて善となり、善も變じて惡と化す、心機が種々に變するは、即ちアラヤの異熟性 因縁業作の縁により、種々に變じて順應す、自性に善にも惡にも、増長すべき因ありて、また外界の機會にも、種々に應化の能力あり、されども外縁のあらざれば、

自ら獨り作さぬなり、

業力六道を爲す因縁

人の天性感覺の、自然の生理を營みて、天性のみの内性は、劣神にして業力は、たとひ形は人たるも、其業は畜類なり、彼畜類の生物は、禽獸昆虫の類より、階級無數に分つとも、只天性の心にて、自己の本能に規定され、種々の作業をなすなり、心思か天性の、稟性の氣に驅られて、荒狼の暴業や、禽の猥ぞや、本能のまゝにして、善惡何れも發達せず、畜類の本能のなかに、生れしまゝの劣態は、人は全體高等の、理性十分發達し、理性の光には肉による、すべての心理みちびきて、正しき人道進むべき、責任あるを無視して、向上業爲の途ざるば、是畜類の業ぞかし、

鬼道に九種の類あり、中に三種を分てば、肉慾我慾が天性の上にもますます發達し、飲食男女の欲などは、本自生理の規定なり、自然の現定を逸しては、無明の感に惑はされ、生理の目的なるものを、慾を食ばる感より、屢爲せば習性が、抗進遂に性となり、いよいよ進まば、五欲の奴隸と、遂に五欲が病的と、即ち無財の鬼となりて、五欲に飢えて、いつも飽くこと知らざりき、多財鬼とは我慾にて、財寶積みて山を成し、するも尙飽かず、愈々我慾つりては、我欲の爲に他の人に、害を與へ、勢力鬼とは世の中に、名譽權利位置などの、我慾の爲に世の人に、てまでも、我慾深くばおのづから、嫉妬の心も深くして、たとひいか程名譽、財寶積むとも、心と業は餓鬼道の、區に入るこそあはれなり、アラヤ業力は、一切の物質元素を吸入し、業力不思議の模型にて、種々の生を造化す、

無明の微粒生が進み出て、人類焔業、無明の心に伏藏して本性、發展したる結果なり、この發展は即ち業勢なり、微粒の生が本能に、先天有せし伏能啓發し、生々世々の努力より、進み進みて生命に、自己の力のある限り、外界の縁を頼みては、生存競争の力、本來性に向上の、心性あれば縁に、助けられては伏藏を、啓發しては向上し、元始の生も内心に、活氣充てしを衝機、生理衝動は自己の、生命を向上せん

と、盲進突貫して、無明と業の生命の發をうれば快に、えざれば苦、衝機は無明、衝氣に稱ふを貪りて、違すれば苦と感ず、衝動苦樂は彼の、生命向上の因縁とし、本來一が分殖し、因縁によりて向上す、原始生より代々間斷なく、各々自己の責任を盡し、努力し漸くに努力し、子孫には向上發達、原始の生物幾分か、進み進みて子に傳へ、惠を後に殘す、然らば我等は自己の、責任を盡し向上せん、

識

生は自己の衝動に、己を益する方に展し、種々の外縁を藉りて、自己を造るを業と云ふ、一個の自治に統へられて、自己一切の身心を、統一自治を識と云、識心本來は、善惡定相なけれども、善惡邪正何れにも、隨業變化の能ありて、白紙が青赤種々の色に隨ふごとくして、六道種々に業力が、力によりて六道の、習慣性を爲す時は、無記異熟アラヤ識、隨業轉變さだめなし、心の自性の因種に、自性を維持して、世に轉々と等流する、生理の理法にも自己の爲す、習慣性を造りては、自己の性を子に譲り、遺傳と云、されども自己は外部なる、縁を待たずば成らざれば、隨縁順應の力より、異性に熟する異熟識、植物果實に熟すれば、全部の種子を有するを、自己の身體及精神の、性相體力悉く、尅識しては傳ふなり、么少微虫のより、高等なりし人類、階級を通して、自己の性相傳ふ、生物原始の劣等より、人類に至りしは、生存競争場裏に、所有る力を竭しては、鬭争勝利を得たるもの、最も高き人類は、群を移して向上し、累代敵にうち勝ちし、勇猛努力の結果なり、四肢五官身體の、全部の力は悉く、自我統一の識神に、尅識しての結果なり、生物進化の目的は、無明の暗黒の性より、明に向ふて進化せり、植物生活は動物、動物よりは人類と、理性の明るを期待せり、しかれば人は萬物に、勝れて明き識心、如來に受けし識心の、深く伏在せる性を、益々開きてある限り、身心共に彌や變し、眞善美妙に向て、發展せらるべし、人はすべての生物に、抜いて職責重し、識とは自我にて人格の、全部を統一する力なり、進めよ進めよ進め、我等が腦裡の奥に、神の秘めたる如來藏、無限の財源藏

あり、世を文明に、腦に藏せる心識の、光を發して明くせよ、

人の命の終には、三種の愛心愛動す、初に境界愛おこり、妻子親族より、乃至家屋家具など、我所有と執し來りしも、永く別れせまるに、執心愛著するほどを、五識の燈箱ぬ、次に末那の我分別より、自身の體を愛念す、全く此身は我なりと、執し來りし此體は、いよいよ意識を失ひて、アラヤの自然に當生のの、境界現前す夢境の如くに、當に受くべき道は、各自の業識尅果せば、道は七に分かる、或は極重惡人の、當に斷末魔に臨みては、熱炎燒煮る如くにて、忍びがたきに、清冷泉を慕ひしに、清涼の池現はれぬ、悦び進みて水に投ずれば、水と見えしは忽ちに、炎と化して身を燒く、自ら造る惡業の、薪を重くつもりては、業火に燒る傷ましや、或は餓鬼畜人天の、己が業に牽かれては、めぐる因果の小事は、代るものや、有らめや、人と生れん、當に終に臨む時、六親つどひ悲しみの、泣聲だにも聞えず、うつろひて、中有の境は現はれぬ、高堂屋の間に、愛の縁にひかれて、識は彼處に、之を中有の、此身を離れし刹那、當生に至るなり、三種愛心は、臨終刹那の念、因縁等流の縁により、福分植福強くば當る家の、父母の許に托すなり、

生理遺傳

たとへば同胞五人の、同じ父母の模型にて、五人ともに相似の中に、各自の性相異なるは、いかなる因縁形向上の縁ありて、されど自然法則は、因縁果報の法則を、逸して外に有らざらん、されば妊娠當時三月の、父母の心意の善惡は、其身心に尅識し、核に其氣を結び尅しては、精子卵子に等流して、胎兒に其れを遺傳す、されば人の父母たる人々は、自ら常に肅みて、自己の形氣を子に傳ふ、其利害は自己に止まらず、子々孫々に綿々と、流るれば、淵川の流れ流れて末は、其水源の土質をば、水に含みて幾ばくの、代々の氣質を托しては、兒に傳へしか數知らず、近くは父母の元質を直に傳ふ、

世の人々よ精神を高くして、天に在ます大みおやの、清きみのりに向ふべし、智徳の

ともに修養し、人格高く形成せよ、人生業力は、結果は自己の識心に、結びて終身作すこと悉く、己が神に尅する、人格は天に對する職にて、進化の階級すゝみ、其子に形氣を傳へては、生器を向上せしむるは、人に報するつとめなり、精神共に明らけく、また清らかにもつべし、天に對し人類に對し、別して責任重きなり、

名色、(生に形と心)

人に色心二面あり、外面生活の身體と、內的生の精神と、此の色心の両面は、二にして一、不離の關係、或は一體兩面を、色心と名づけしなり、されども身には質碍、心には無碍にて、識心母胎に宿るとき、識は名ありて形なし、質元の身と合ふときを、名色とは名づけたり、識に福徳強ければ、因縁應じて、精子の元質は、單細胞の精子に、たとび偉人の元質とても、生物の原始のアメバと、毫も異點は發見せじ、されども不思議は、此の細胞の伏藏する、身心性能悉く、伏藏して漸々に、無數の時間を経るほどに、生物原始の微粒より、生物進化の階級は、無數の時間に、外部の縁に資けられ、無數の世代と階級を、經歷しては漸々に、進み進みていと高き人類を、原始の人を進化して、動物人の類より、開化の人と、無數の代と時間とに、進みしものをくり返し、人の兒を胎内十月に、進化の階級經歷しては、人の兒として、名とは識神一切の、心理を藏せる、色とは父母の遺體の色、名は陽精の神にして、色は陰精の質なり陰陽合して人となる、活動の力あり之を精神として、生理的には物質の元形質に本づきぬ、(以下斷章)

十二因縁序説

三三

- 一、人生の縁起を心識の三世因縁と體系遺傳の両面より説明す。
 - 二、人生の縁起を覺明するを宗とす。
 - 三、心靈及び身體遂性完成を期し自覺的家庭代々に向上する目的。
 - 四、十二因縁の圖式。
 - 五、人生の主體生命の諸説。
 - 1、生命唯物論に物體生命と特殊精氣。2、生命唯心論。3、物心併行論。今併行論。心識輪廻と生物遺傳併行。
 - 六、人生縁起の諸説。
 - 1、超然神の所造。2、一大元氣自然道法。3、業力所感。4、阿賴耶識。如來藏性。重々無盡法界縁起。
 - 七、開覺すれば聖者となり無明に縁れば六道に輪廻す。
- 十二因縁本説。(心識六道輪廻次第と生物遺傳)
- 一、無明 \parallel 生死の源。生物原始。
 - (甲) 1、惑業苦の關聯。2、起信の業轉現。3、唯識阿賴耶識。4、俱舍の業。今は全一如來藏性。二展世界性。三展衆生性。原始極小は極大の縮小。
 - (乙) 生物原始。電子精氣單細胞生物。極小微粒。同化成長力ある原形質。生物の發生人類最下生の卵。同一の無膜細胞。若心、若體系、何に縁つて種々に分岐するか曰く因縁と業行に由る。
 - 二、行 \parallel 衆生本定性無し行業に縁つて善惡六道と分る。
 - 1、不覺盲動三惡道。2、理性自覺三善道。3、行爲の習慣第二天性。4、下等動物努力結果人類と進化。5、嚮動、衝動、意志動三あり。
 - 1、生物全體若くは部分使用に隨て發達。2、不用部分の退化す。3、人の腦髓心

三三

性の各部仁慈靈妙乃至破壞等六道に配すべし。4、腦髓の部使用する性發達(各自の短所を認めて矯正高等の性發揮を要す)。5、引業(形式)滿業(實質)。

三、識。

- 1、入胎の刹那の阿賴耶識過去一切の事物種子を含藏し外縁を待つて現起す。2、臨終三種愛(境界愛自體愛當生愛)。3、中有身半身計。4、無明同一性變化六道の我となる同一原始生物四十萬動物十二萬植物と化す如し。5、生物遺傳の説。
- 四、名色 \parallel 無形の識と父母の形質と合したる位。
 - (甲) 1、貧富貴賤因縁相應して入胎。父母品性高卑胎兒の質に及ぼす。
 - (乙) 1、精子卵子との合體。2、生命核と外包。3、單細胞と複細胞生物。4、複雑なる遺傳の質
- 五、六入 \parallel 胎内十月胎兒の五位。(和合、頤、血肉、肉團、支節形)。1、過去の因質と胎中の縁。2、妊婦素行胎兒。3、土偶の土と模型。4、胎教の效能。5、胎内七ヶ月と生後七年。6、妊婦感情鋭敏。7、環境より胎兒に及ぼす例。
- 六、觸 \parallel 孩と嬰と小兒の期生れて六歳に至る萌芽の期。
 - 1、小兒大人と身體不鈞。2、身心發育上の注意。3、搖籃教育の出發。4、慈母の懷が長生。5、心身の觸の適度。6、嚴父温母との調和。7、溺愛の不可。
 - 8、家庭の神聖。9、美德の萌芽推理の注意。10、遊戲と玩具。11、氣質の淘汰。12、生物進化の繰返。
- 七、受 \parallel 小兒より童子青年に至るまで長養の期。
 - 1、天性具はる肉と薰陶の縁。2、禽獸と異る點。3、の注入と開發。4、受は天資を完全ならしむ。5、適當の目的と方法。6、本能習慣特性と教育。家庭學校四圍の縁。7、身心發達の時期。8、身心の薰陶。9、教化(智)。感化(情)。訓化(意志)。10、家庭は内に、學校と社會は公共徳。
- 八、愛 \parallel 青年過度の時代春期開花期

三四

三五

1、外部と共に内部の變化。2、男女特性の發達。有機形成に全力を注ぐ人生の危機。虚榮は此期を利用して自覺的發達すべく内機の愛情と共に外界の虚飾。3、向上。春期花開の旺盛。活動。破壊。進歩。向上。花に嵐の喩。人生の花結婚。

(イ)配偶の適當。(ロ)已婚の性格變。(ハ)兩性遺傳質。

九、取_レ壯年より成熟期、執意個性より形成は人生果熟。取_レ執意個性を形成す。

1、方針確定幸不幸分岐。2、父母放任と干渉弊。3、職業繼承の否。4、適當の職業。5、人格形成。6、家庭の六道。7、行爲の責任。8、人執心する方面に人格を形成す。9、人格核に善惡各三業。

十、有_レ各自畢生の人格形成の種子核の成熟。

例へば植物種子產生起の作用ある如し。知識財産位置等悉く捐てて一生の業より結ぶ六道の種子識のみ有て未來に赴く。

十一、生_レ現在の種子より未來の生を萌芽す。

1、種子の種々。2、生物細胞組織の交代生者必滅。3、精神發達順序。嬰兒感覺と直覺一より七。知覺感覺の觀念八歳まで。根念推理十五まで。活動的推理十八まで。有ゆる心力を以て理想を作る二十四歳。人生の光明。孩嬰幼青。壯成熟光。

十二、老死。

1、處世觀。2、厭世と樂天。3、何等人生の幸福。4、人生の目的。5、生物界人間の位置生活の三位。6、頭腦の三階。天性、理性、靈性。7、靈性開發自覺光永生を得。理性善用は三善道、天性惡なるは三惡道、此の善惡の業道は六道輪廻して出期なし。

結 論

心靈は生理的生命を向上せしむ。生理的生命の向上は心靈的生活の手段と爲る願は心靈と偕に生理的の向上を目的とし近く家庭に及ぼし社會改善に身心を献げんことを請ふ。

大正十三年十二月二十日印刷同月二十五日發行
 誌代年七冊壹圓貳拾錢 年十二冊貳圓
 編輯兼發行人 山 崎 辨 成
 印刷人 東京市小石川區表町一〇八番地 中 橋 昌 平
 發行所 東京市小石川區水道端二丁目四十四番地 ミオヤのひかり社
 振替東京六六八五一番